

平成19.10.25

- ・松陰敬仰の気運醸成
- ・松陰精神の継承普及
- ・松陰教学の研究振興

○編集発行 財団法人松風会
〒753-0072 山口市大手町2-18
山口県教育会館内 TEL・FAX 083(922)1218
<http://www9.ocn.ne.jp/~shohukai/>

松 門

『吉田松陰日録』



財団法人 松風会
理事長 松 永 祥 甫

刊行にあたって

山口県教育会ではこれら膨大な資料を取りまとめた夙に三回にわたって『吉田松陰全集』を刊行しております。



松陰先生墓碑に参りて

世界の平和と人類の幸福を期待して幕開けした21世紀も早7年を迎えました。日本もあの焦土と化した国土から60余年を経て、今美しい国日本、また国家の品格という気品に満ちた言葉が胸を潤すようになりしました。その実現への強い期待が込められた言葉であります。

現在、社会はなお混沌の謗りを免れ得ませんが、あたかも明治維新は欧米諸国の東洋制覇の最中、封建社会から近代国家建設、更に世界の中の日本となった歴史の事実であります。その維新の原動力は吉田松陰先生であることは揺るぎない定説であります。時代を先取りされた松陰先生に学べという声は日増しに高まっています。

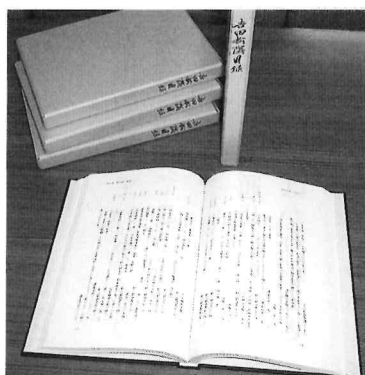
幸い松陰先生に関する資料は日記、書簡、著書、その他によって実に豊富であります。

当財団法人松風会は吉田松陰先生を崇敬し松陰精神の普及振興に生かすことを目的として昭和49年に設立され、松陰精神の研究、研修事業を行って参っております。

本会は、『吉田松陰全集』の内容事項を年代順に列記し

た「日録」を作り、読者、研究者の便益の資に充てんことを発意し、本会創立30周年記念事業、更に平成21年松陰殉節150年記念事業の一環として取り組みました。いわば「吉田松陰辞典」と申しても過言ではありません。平成15年、本会理事であり指導者の河村太市、石原啓司（9月18日ご逝去）、松田輝夫、折本章及び室謙司諸先生による編集委員会を結成し、3カ年にわたる鋭意ご尽力の結果この度の発行となった次第であります。編集に当たられた先生方に対し深甚なる敬意と感謝を捧げます。

必ずや読者、研究者各位のご期待に添いうるものと確信いたします。いささかでも時務の要望に添い得ますれば望外の幸せに存ずる次第であります。



『吉田松陰日録』

（財）松風会設立30周年記念 松陰殉節150年記念

吉田松陰日録

松陰30年の生涯を通じて日々の錬成を明らかに

頒布価格 3,000円、送本諸費実費 200円程度 体裁 A5判 クラフトケース入り 本文344頁

採録を終えて

ここに吉田松陰在世の日々を、『吉田松陰全集』から採録する作業を終え、これを『吉田松陰日録』として出版することになった。

松陰の日録としては、すでに昭和18年に狩野鐘太郎氏によって、『吉田松陰全日録』（新興垂社）が出版されている。その出版の意図として、「松陰30年の生涯を通じて、日々の鍊成を知りたかった」こと、及び今日まで松陰に関してこの種の出版がなされていないことの二つを挙げておられる。

私たちの『日録』編集の意図もおおよそ狩野氏のそれと同様だといえる。なお、私たちは、日録採録の作業を通じていくつかの感想を抱くことになったが、それらは、日録作業の意義を示しているものだと思うので、ここで三つばかり紹介させていだこう。

かつて思想家藤田省三氏は、「松陰に主著はない。彼の生涯そのものが彼の唯一の主著そのものであった」と洞察されている。（日本思想大系『吉田松陰』解説、岩波書店）。この度の日録採録の作業は、藤田氏の右の洞察を共感をもって想起させることになったことが感想の一つである。

教育学者の岩橋文吉氏は、「人はなぜ勉強するのか」という基本的な問いへの答えを、自らの内なる天性の声とともに、松陰の生涯の中に見出すことを勧められた。（『人はなぜ勉強するのか 千秋の人吉田松陰』、モラロジー研究所）。この勧めは松陰に学ぶ貴重な視点だと言えるが、その際、本書が役立てると思ったことが二つ目の感想である。

「学問の大禁忌は作輟なり。或いは作し或いは輟むることありては遂に成就することなし」（『講孟余話』公孫丑（上）第二章）とは松陰の人生指針であった。松陰の日常をたどることによって、彼が指針を誠実に生きた証を身近にすることができたように思う。そして、彼が作輟なき日々を重ねたが故に、その最後のときにおいて、「義卿三十、四時已に備はる、亦秀で亦実る」（『留魂録』）と一種の満足感をもって自らの生涯を省みることができたのであろう。三つめの感想である。

ここにおいて、本書は、いわば検索などに利用くださるだけでなく、読みものとしてもご覧いただけたらとの願いを持つ次第である。そのため、最小限ながら簡単な説明などを施させてもらった。

なお、日録の採録を可能に出来た最大の要因は、松陰が自作の詩文には、その多くに作成の日付を記してしてくれたことである。多くの日記（日乗）類や書簡はもとより、著書、論文、その他の述作の多くに、執筆の日付が明記されているのである。加えて、実に精力的に「資料探訪」に努められ、さらに収集された全詩文を、ジャンル別、年代順に整理して『吉田松陰全集』を編まれた編輯校訂委員の安藤紀一、広瀬豊、玖村敏雄の三先生の学恩にお礼申し上げさせていただく。

また、「底本版」、「普及版」、「大衆版」と3回にわたって『吉田松陰全集』の編纂発行を実現された（財）山口県教育会の御貢献に対し深甚なる敬意と感謝のまことを捧げるものである。

最後に、見落とし、誤り、その他のお気づきなどご教示をお願い申し上げる次第である。

編集委員

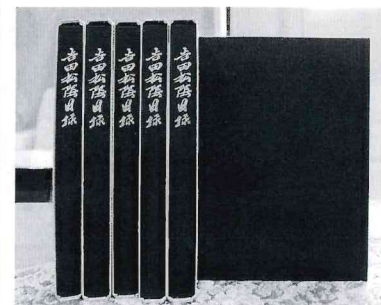
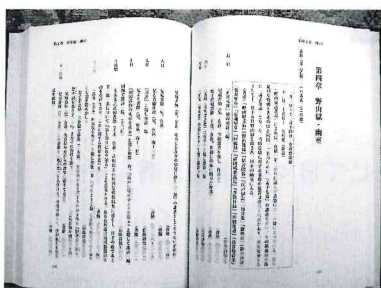
河村太市（文責）

石原啓司

松田輝夫

折本章

室謙司



凡 例

一 本日録は、昭和49年完結の『吉田松陰全集』（大和書房）を底本（以下底本という）とし、不足の資料については、昭和11年完結の『吉田松陰全集』（岩波書店）を参照し、吉田松陰に係わる全ての事柄を年月日順にまとめた。

二 事柄毎に、その文末に出典を題目、巻数1巻～10巻（①～⑩）・別巻（別）、岩波書店版（定）を入れる。

三 事柄の要旨、説明を（ ）で記した。

四 読み易くするために、旧漢字をできるだけ常用漢字に改めた。しかし、固有名詞、歴史用語又は特殊な用語などについては旧漢字も適宜使用した。

五 読み仮名は、主として底本及び平成八年（財）松風会発行の『脚注解説吉田松陰撰集』を用いた。

六 見出し、詩文題目など底本の引用文は原文のままの文体とし「」符号で囲んだ。

七 毎年の初めに、その年の主な事歴をカク内に示した。

八年・月・日が分らない場合は「不詳」とし、原則として日が不詳の場合は、月末へ、月が不詳の場合は年末へ、文面から予想できる場合は「不詳」として、ふさわしい年・月の場所へ載せた。

目次

刊行によせて
採録を終えて

凡例

第一章誕生・幼少時代

天保元年（一八三〇） 一歳
天保三年（一八三二） 三歳
天保七年（一八三六） 七歳

第三章遊歴

嘉永三年（一八五〇） 二二歳
九州遊学
嘉永四年（一八五二） 二三歳
第一回江戸遊学

第二章兵学修業

天保九年（一八三八） 九歳
天保一一年（一八四〇） 一歳
天保一四年（一八四三） 一四歳
弘化二年（一八四五） 一六歳

第二回江戸遊学

長崎紀行

安政元年（一八五四） 二五歳

下田踏海

江戸獄投獄

野山獄投獄

第四章野山獄・幽室

安政二年（一八五五） 二六歳

幽室

安政三年（一八五六） 二七歳

第五章松下村塾

安政四年（一八五七） 二八歳

松下村塾

第六章野山獄再入獄

安政五年（一八五八） 二九歳

野山再入獄

第七章殉難

安政六年（一八五九） 三〇歳

東行・江戸獄・処刑

第八章松陰殉難後

万延元年（一八六〇）
文久元年（一八六一）
文久二年（一八六二）
文久三年（一八六三）
元治元年（一八六四）
慶応元年（一八六五）
明治七年（一八七四）
明治九年（一八七六）
明治一〇年（一八七七）
明治一三年（一八八〇）
明治一五年（一八八二）
明治一八年（一八八五）
明治二〇年（一八八七）
明治二三年（一八九〇）

明治二四年（一八九一）

明治四四年（一九一〇）

資料

あとがき

事項索引

主要著述索引

語録・詩・歌索引

購入方法

電話・FAX・メール・はがき等で、本の届け先（〒・住所・氏名）を松風会事務局へ連絡する。
松風会ではそれを受けて送本する。本が届き次第、書籍代金（3,000円）・送本諸費（200円程度）を払い込む。（郵便局の払込票を利用または指定銀行口座へ振り込む）

（財）松風会事務局
753-0072山口市大手町2-18
県教育会館内
Tel/Fax:083-922-1218
Mail:shohukai@gold.ocn.ne.jp

松陰研究グループ紹介

美祢松陰研究会その後の歩み

代表 岩野和夫

一 発足と経過

松陰教學の研究を目的に昭和53年美祢郡市の現職教員で発足したことは、先に「松門」第8号に紹介した通りである。30年間には曲折もあり課題もあるが、継続されていることに意義と誇りを感じている。

二、本会活動について
1 定例会

毎年10回の定例会を開催する。

参考資料は「吉田松陰撰集」(松風会発行)を基本に各月の研究主題に基づき、輪読後の意見交換を交え感想を述べ合うことから、現在の教育に話題は拡がる。

5月 投夷書 下田踏海を
決する

6月 二十一回猛士説
を見守る家族
ゝ志

7月 士規七則　　ゝ忘れられ
ているものはゝ

8月 現地研修
↳ 宮部鼎蔵



花岡本陣跡を訪ねて

生誕地を訪れる
9月 七生説 〓 生きること
の追求
10月 松下村塾記 〓 進学塾
と比較して
11月 諸生に示す 〓 師道の
あり方
12月 卓然自立の会
1月 吾れの尊攘・玉木叔父
に上る
2月 留魂録 〓 維新を見定
めて

2 「吉田松陰投宿之碑」建立

平成8年5月4日、本研究
会発足20周年記念活動とし、
会員の総意に基づき、美祿市
大嶺町四郎ヶ原に建立する。

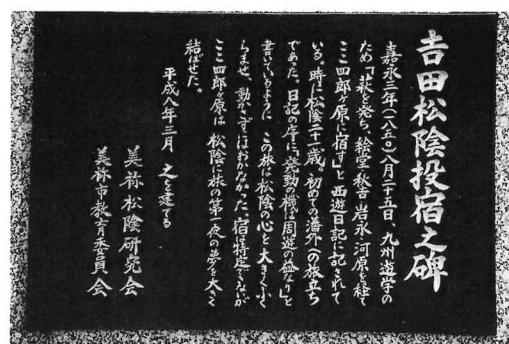
「西遊日記」にある如く、
「萩を發し、明木より右折し
て馬関の道につく。繪堂・秋
吉・岩永・河原を経て四郎ヶ
原駅に宿す。」とあり、若い
松陰が夢を抱き九州遊学のは
じめの投宿の地であり、こ
こで夢見たものはその後の松
陰を大きく育てたことに思い
を寄せ、松陰と美祢の地の深
い関わりを表すものとして
「投宿の碑」を建立する。



投宿の碑



松陰護送日記



投宿の碑文

「吉田松陰投宿の碑」除幕式 平成8年5月4日 美祿松陰研究会

3 現地研修

会発足以来、毎年松陰ゆかりの地、碑、遺跡を訪ね、その時の心の内外の想いを感じ、松陰を偲ぶ機会とした。

萩には数多く足を運び、その都度、多くの方々から指導を受ける。最近では明倫小学校を訪ね「朗唱教育」について校長先生より指導も受けた。山陽道方面は、小瀬川・関戸・高森・呼坂・上関の歌・石碑、花岡では本陣跡で「護送日記」を読ませて頂いた。本年度は松陰の生涯の友、宮部鼎蔵の生誕地熊本県御船町を訪ねる。



小瀬川河畔の歌碑

鼎春園にて



上関詩碑



宮部鼎蔵生家跡・井戸



5 30周年記念公開講座開催
平成18年11月26日、市民会館において開催する。
主題 「松陰の生家杉家の人々」

少年塾



4 その他の活動
○会員による中学生を対象に意識調査と結果の発表。
○中学生によるテーマ学習への協力
課題を「松陰の生きざま、松下村塾と門下生のその後」ということで1年間、調べ・読み・訪ねる課題追求の協力応援。
○市教委主催の「少年塾」での一単位講座を受け持ち、「松陰先生と美祢」の関わりについて講話と実地見学をする。

美祢市内のみなさまへ

美祢松陰研究会公開講座のご案内！

松陰研究家 松風会理事 松田 輝夫 先生による講演

演題 「松陰の生家—杉家の人々—」

吉田松陰を生んだ杉家の家庭教育を考えるなかで、美祢市の教育にも貴重な訓示がいただける講座内容になると思います。

ぜひたくさんのお参加をお願いします。

期 日 平成18年11月26日(日)

10:00~12:00

場 所 美祢市民会館 2F 大会議室

この講座をきっかけに、これから美祢市の学校教育や幼児教育・家庭教育についてみんなで考えていきましょう！

入場無料 お気軽にご来場ください。



事務局 美祢松陰研究会(美祢市教育委員会学校教育課内)

担当 西村 睦人 Tel0837-52-1118 Fax0837-52-2562

講師 松風会理事 松田輝夫先生
目的は市民の皆さんに一人でも多く家庭教育、幼児教育、学校教育について教え合う一助とする。
三、おわりに
長く続けることにより多くの課題が残る。
・人の意識の変化が急速にすすむことへの対応。
・意識を持ち続けながら、多くの人の声を聞き取り入れるための方法。
・自らが楽しむだけでよい。等々。
美祢と松陰の関わりは深い。

美祢松陰研究会事務局

759-2212

山口県美祢市大嶺町東分326-1

美祢市教育委員会学校教育課内

代表 岩 野 和 夫

担当 西 村 睦 人

Tel: 0837-52-1118

Fax: 0837-52-2502

このことを考え、今後とも継続と発展に努力したい。

第7回松陰研修塾基礎コース講義要旨

「先師山鹿素行について」

(財)松風会理事 折本 章

はじめに

現代に生きる多くの人は、戦前の厳格な教育をすべて非となし、戦後の規律を伴わない自由な教育をとかく是としがちである。しかし、戦後の教育がいかなる人間を生み出したかを考え合わせれば、その評価は自明である。敗戦後の日本は、従来のよき伝統、美しさ、正義感、仁愛などの大切な精神が多く失われ、国民としての自信や自覚は地に落ちた。その結果、日本は低俗でだめな国だという自虐的な考えが広がり、人々は美しき伝統的な日本の心から離れていった。

今の世に松陰が姿を現したならば、どういう思いを投げ



掛けるだろうか。国民全体に対しては「読書に励み、学問を積んで日本固有の美点・伝統を求得せよ」、政治家などに対しては「私利私欲を捨て、公のために尽くせ」と発破を掛けるであろう。つまり、「私を役して公に殉じよ」と迫ること必定である。

松陰が先師と仰ぐ山鹿素行は、日本の伝統・文化、良さ・美しさ等を讃美し、その伝播に努めた人物であり、松陰はその思想に感動し共鳴した。

戦後の教育は、自由の真の意味を履き違えて行われた。自由の段階には、勝手放題、つまり欲望の赴くままに行動する動物的自由、法の決まりのみに従う社会的自由、利心を薄くして理性に従う道德的自由の三段階が考えられる。困っている人に愛の手を差し伸べるか否かは自由であるが、これを助けずにはおられない理性に従う行為こそ、道德的自由である。

近頃、苛々していたから、気に食わないからといって、大切な人命を簡単に奪ったりする動物的自由が横行している。大恩ある父母を殺害する犯行も増えている。そして、思うようにならないければ、自力で解決しようとせず、すべて他人の責任にしてしまう。

気力、志、正義、耐性、責任感のない人間が続出して、義務や規律に目を向けず、個人の権利や自由ばかりが主張されてきた戦後教育の結果である。



山鹿素行座像

昔は家族や地域の絆が強く、子供はその絆の中で立派に育っていった。卑怯、挫折、不義、臆病な行為は、親の面汚しとか、お天道様が見ているとか、隣近所に顔向けができないとか言って、子供を叱咤し諭した。強い絆の中にあつて、卑怯者、意気地なしなどと言われることは、心の

琴線に強烈に響いた。ところが、今日の人間は「卑怯者」と叱咤されても、一向に内なる心に届かない。

昔は耐性が重視されてきた。伊藤博文が奉公先の主人の言い付けで他家に使いに行つた帰り道、雪の舞う厳寒に防寒具も着けず、唇を紫にして寒さに震えながら実家に立ち寄つた。ところが、母は主人の使いの途中に、私事で実家に立ち寄るとは何たる不始末かと、厳しく叱責して一歩も家に入らず追い返した。今の世であれば、直ぐに家に入れば、温かい食べ物を与え、暖を取らせることであろう。

大島(柳井市)の僧月性(げつしょう)が「男児志を立てて郷関を出ず 学若し成る無くんば復還らず 骨を埋むる何ぞ期せん墳墓の地 人間到處青山有り」と詠んだ出関の詩はあまりにも有名である。自分の志が達成できなければ、二度と故郷の地は踏まないという厳しい覚悟がにじみ出ている。松陰の東北遊歴のビデオ(青森朝日放送「道に歴史あり、吉田松陰の足跡とおももり」青森県中泊町、柳沢良知氏寄贈)を見て、皆さんから松陰は積雪の山道を何時間もよく

歩いたものだという感想が寄せられたが、昔の人の頑張りや忍耐力は本当に素晴らしいものであつた。

山縣半蔵、高杉晋作、杉徳輔などいろんな人物が、幕末に海外に渡っているが、彼らはいずれも幕府の役人に随行しての公然とした渡航であつた。しかし、井上聞多(井上馨)・伊藤利介(伊藤博文)などの長州ファイブは、幕府を無視した密航であり、表沙汰になれば、重罰に処されることを覚悟しての渡欧であつた。横浜を出航してロンドンに到着するまでに4ヵ月と11日を要している。盆から正月までに相当する長い期間を荒れ狂う小さな船の中で過ごしたことになる。今日では想像もできない耐性の強さがある。

1 日本武士道とその品格

(1) 戦国乱世の武士道

乱世においては、武士は戦争の際、主君を守り主君のために命を捨てることを眼目とした。大言壮語して実行が伴わないことは最も嫌われ、戦場で功績を積み重ねることが第一義とされた。不言実行が武士道の核心であつた。従って、今

日のように理屈を付けて道徳を教えることはなく、暗黙のうちには駄目なものだめと自ずから体得した。

戦場で手柄を立てた者は禄高を増され優遇された。反対に何ら功績のない者は下層に甘んじ、陽の目を見ることはなかった。つまり、功績が何より優先されたから、皆それを競って戦場に赴いた。戦争に敗れば、家族、一族を路頭に迷わせる羽目に陥る。こうした状況にあつては、生と死とは常に隣り合わせになっていた。

君臣主従の間に醸し出された情誼、つまり主君はその家臣を愛護し、家臣はその主君を頼み、主君に仕えて身を以て主君を保護する君臣間の情誼こそ武士道の基礎であつた。日本には道徳の実行があつて道徳の理論は発達しなかったが、中国では道徳の理論は発達したが道徳は実行されなかったと素行は言う。言挙げせぬことを尊んできた日本では古来から実行が重んじられたことがうなずける。この時代の武士道は実践道徳であつて組織だった教義は未だ成立していなかった。恥を知る心、戦功を挙げん

事を思う心、武勇や礼儀を尚ぶ心、犠牲的精神、生死の超越などが重んじられた。沈黙寡言にして勇猛果断であることが強く求められた。殺らねば殺られる厳しい時代であつたから、大敵を恐れず、小敵を侮らず、常に冷静で軽率な振る舞いがないよう心掛けていなければならなかった。

(2) 泰平な世の武士道

徳川時代に入ると世は安泰となり、大きな戦争はなくなつた。武士はその戦争を介在して生れたものであるから、武士としての任務もなくなつた。しかし、いつ誰が謀反を起こすか分からない。「治に居て乱を忘れず」の教訓もあるように、泰平な世においても、なお多くの武士を抱えていなければならなかった。家康にも苦心して得た平和も、いつ何時破れて再び戦乱の世に戻るか分からないという心配が心の隅にあつた。

ここに武士としての新しい職分が求められなければならなくなつてきた。耕さず、製造せず、商わずして農工商の上に位置する、言わば遊民となつた武士の職分が、三民に納得されるよう定められな

ればならなくなつた。戦乱の世であれば命を懸けて戦い、これによつて三民を護るという目に見える職分があつた。従つて三民も武士としての任務を認めない訳にはいかなかった。

ここに仁義の実践を眼目とする新しい武士道が生まれることになるが、これによつて武士たる者は三民の尊敬を得ることが強く望まれることになつた。ここに教義としての仁義的武士道が勃興することになる。この武士道は実践的な中世の武士道に儒教的精神を溶け込ませたものであつた。武士道の鼎の三脚は「智、仁、勇」であり、これらの実践が強く求められた。

源氏を倒した平氏は、武人としての魂を失ひ公卿化してしまつた。このためたちまち源氏に政権を奪ひ返された。頼朝はその轍を踏まないよう留意し、政権を握つた後も武士としての本領を失わせないよう努めた。頼朝の政治を模範とし頼朝を深く崇拜していた家康も、武士らしきやその本領を失わせないよう心を砕いた。世に三河武士と賞賛されるに至つた所以であろう。

(3) 武士としての品格

鳥獸、草木、虫など万物は、精いっぱい努めて自らの食を求め、生き長らえている。武士がその職分を果たさないで生きるなら、武士は賊民であり生を偷む遊人と言わざるを得ない。ここに武士の存在理由をはつきりさせる必要が生じてくる。武士は自らの職分を明らかにしようと努め、その職分を究明することによつて、はじめて武士らしく胸を張つて生きることができる。

徳川幕府は武士に対して、他の階級においては見られない特別の修養を要求した。それは文武、忠孝に励み、仁義、悌、信、勇などを実践して三民を護り、三民の模範となつて尊敬を得ることであつた。文や武に偏らず、文に励み武に励み、文武両道に秀でることが求められた。

素行は『聖教要録』を著して幕府の怒りに触れ、赤穂へ謫流される際に、「書き残しておくことはないか」と尋ねられたが、「外出時は何時も身辺整理をしているので、今更なにも心残らない」ときっぱりと答えた。松陰はこの武士としての潔さ、覚悟、品格に深く感動した。先師と仰

いだ所以である。

「花は桜、人は武士」――僅か三、四日、華麗に咲いて潔く散つていく桜花に人生を投影し、他の花とは格別の美しさや品性を見いだしている。死を嫌い恐れるかのように未練がましく茎にしがみ付いたまま、色あせ枯れていく薔薇、しかも刺を含んでいる薔薇などとは比べ物にならない。潔さ、惑わぬ覚悟なども武士の品格である。

2 山鹿素行略伝

1622年(元和8 1歳)
8月16日、会津若松に生まれる。

3代将軍家光就任。

1630年(寛永8 9歳)
林羅山(朱子学権威)に入門。
この年までに四書・五経・詩文を読み覚える。これにも松陰は感心している。



山鹿素行生誕の地(会津)

1632年(寛永9 11歳)

松江城主二百石で召抱えたいとの申入れを父が断わる。

1636年(寛永13 15歳)

北条氏長の門に入り甲州流兵学を修める。

1652年(承応2 32歳)

12月浅野長直に仕え、翌年播州赤穂へ向けて江戸を発つ。

1656年(明暦2 35歳)

『武教小学』『武教全書』を著す。

1659年(万治2 38歳)

落馬して負傷。大石良雄生まれる。

1660年(万治3 39歳)

浅野家を辞任。初めて津輕信政邸を訪れる。

1665年(寛文5 44歳)

父貞以病没。『山鹿語類』『聖教要録』を著す。

1666年(寛文6 45歳)

大目付北条氏長の呼出しを受けて赤穂へ謫流され、浅野長直に預けられる。

1669年(寛文9 48歳)

『中朝事実』を著す。後に乃木希典これに感動し、筆写して皇太子に奉上した。

1675年(延宝3 54歳)

赦免され赤穂を出発、8月江戸着。赦免後は経芸を廃業し、時流と合わないため、処士(在野の士)を集めることを禁じられる。『配所残筆』を著す。

著す。

1685年(貞享2 64歳)

將軍家侍医の治療を受けるが、その効能もなく9月26日積徳堂に没す。

1702年(元禄15 没後17年)赤穂47士吉良邸に打ち入る。

3 素行の著書

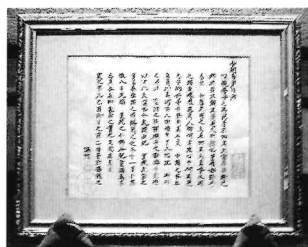
(1)聖教要録(1665年、45歳)

朱子学の泰斗・林羅山に師事して朱子学を学んでいたが、朱子学が徒に高遠な理論を弄ぶだけで、實際社会に及ぼす効果に疑問を抱き始めた。そこで、後世になつて説かれた教説を一切捨て、周公・孔子など上古聖人の教えに立ち返り、その真精神を明らかにしようとした。つまり、周公・孔子を師とし、漢・唐・宋・明の諸儒を師としない決心をした。学は聖教を志して異端を志さずとして聖教を追及した。かくして聖教要録を著したのである。

門人たちは幕府の激怒に触れることを憂慮して、この書を秘して公にしないよう言上したが、素行は「秘するに足らず、道は天下の道、秘してこれを蔵すべからず。天下に公然と示して万世に行わしむべし」と説いて堂々と出版し

た。革新と復古とは一見反対で矛盾しているようだが、革新は復古を目指すことが多い。年月の経過と共に、次第に異端に流れていった思想を元の正道に引き戻すという行為が革新の形となつて現れる。こうした事は今日の社会でもくり返されている。

幕府が名教の基礎としていた官学・朱子学を世に役するところがないとまで言い切つたのであるから、幕府の立場も丸つぶれである。学問の師であり、大目付であつた北条安房守に呼び出され「要らざる書物を作り候故、浅野内匠頭の所へ御預けなられ候。これより直ちに彼の地へ参るべし」と言い渡された。



『中朝事実序』平戸山鹿家

門人の奪回に配慮して、厳重な警護の下に赤穂へ送られた。死罪を予測し公儀宛遺書を懐に忍ばせていた。それに

は「我を罰する者は、周孔の道を罰するなり。我は罰すべくして、道は罰すべからず。心底これにて動き申し候事は聊かもこれなく候」と毅然とした覚悟の程を示している。こうした事態において、謫流という軽い罪で済んだのは、諸藩主や幕府要人に門人や理解者が多く、うまく取り成してくれたからだという。

(2)中朝事実(1663年 48歳)

当時、支那を中華・中国と称え、自国を東夷(昔、中国人が東方の異民族を輕蔑して呼んだ蔑語)として卑しむ風潮があつた。日本固有の文化や伝統を蔑み、日本には元來道德なるものはなく、禽獸と等しい生活を営んでいたが、支那から聖人の道を学んで初めて人間らしい生活をするようになったと思ひ込んでいた。つまり、外を尊び内を卑しむ「尊外卑内」の思想が大勢を占めていた。

日本は小さい島国である故、大国支那には何事も及ばず、聖人も異朝から出ると卑屈に陥っていた。また、日本本のように血統を以て皇位が定まるのは野蛮な国であると、支那の禪讓放伐(天子



『中朝事実』(平戸山鹿家)

が徳の高い人に位を譲つたり、徳の低い天子を辞めさせ討つこと)を是認した。皇位の万世一系と相反する考えである。

こうした風潮の中で、素行は日本こそ中華であると主張して憚らなかつた。尊貴なる日本古来の精神を堅持しつつ、儒教の中の採るべきを探り、捨てるべきを捨てて、我が国民道德發達の榮養素たらしめ、我が国体の尊嚴をより明確にした。儒教の中核的部分である禪讓放伐や民主的部分は、封建的な日本の国体と相容れない故、これらは除外して儒教を武士道に同化した。

素行は本著で「夫れ中国(日本)の水土は万邦に卓爾(高く優れる)として、人物は八紘(天下)に精秀たり」と述べているが、本書の核心

は「本朝（日本）が中国であり、中華こそ日本である」という日本の真価を知らしめる処にある。つまり、内外尊卑の弁えを顛倒した卑屈な思想を正道に戻そうとした。

日本は何千年も天皇の家系が変わっていない万世一系の国である。国家は一家の如く敵対し合うこともなく、国民が仲良く暮らしている。しかし、異国においては争いが絶えず、天子は変わりつめた。日本においては考えられない天子の放伐も、外国では何度も行われてきた。学者の多くが自国の尊厳に目を向けず、盲目的に外国を尊ぶ誤謬に陥っていることを憂え、放心を取り戻そうとした。

学んだことをよく消化し同化する者は、これを駆使して自国の美点を自覚する。このような精神に則って中朝事実を著し、我が国体の尊厳を明らかにした。素行は儒教の精神をよく消化し、これを日本化して駆使することができた。しかし、どうしても日本の精神と馴染まない要素は、これを葬り捨てた。

(3) 配所残筆(1675年 54歳)
浅野家にお預けになつてか

ら10年目の延宝三年の著作で、弟の山鹿兵馬と娘婿山鹿興信に宛てた遺書の形で書かれている。思想的自叙伝として高く評価され、思想の変遷を分かり易く述べている。素行も最初は一般の学者と同じく、異朝に憧れ異朝のことばかり学んでいた。本書にはそのことが次のように述べられている。

「十年前までに輸入された書物ならばほとんど一読した。そのため知らず知らずの内に、異朝の事を万事良いと思うようになり、我国は小国で何事に付け異朝に及ばず、それ故にこそ聖人も異朝に現れると思つていた。近頃になつて初めてこの考えが誤りであると思うようになった。身近な所を軽んじて、遠い所のものを尊ぶというのは学者の通弊。神代から今日まで、その正しい血統は一代も違った事がなく万世一系である。天子の徳が高く、世を乱して天子に背く不義不道の者がいなかったからである」

かつては支那を中華として、その文明に心酔していた素行は『実は自国こそが中国であると自覚するに至ったこと、朱子学に対して批判的見

解を抱くようになっていった経緯、そのため赤穂に謫流されたこと、「日本主義」的傾向とは「天皇中心主義」であること」などと書き残している。

4 素行と松陰

(1) 平戸の山鹿萬介と

津軽の山鹿素水

山鹿家の祖先は東肥山鹿の居住者で、その地名を採って山鹿姓とした。素行自身は会津に住んでいたが、その子孫が肥前の松浦家、伊勢の藤堂家、津軽家に分かれた。正統は素水で、萬介は弟の流れとされている。諸藩は高禄を以て素行を召抱えようとしたが、素行は応じず、平戸藩は素行の実弟を高禄で迎え重用した。初めて平戸に往つたのは三代目の高道であったが、それは素行没後60年を経過してからであった。

実際に栄えたのは平戸の山鹿家であり、松陰は家学・山鹿流を嫡流から直接に学ぶため平戸に遊学した。しかし、実際には陽明学者・葉山左内から学ぶことが多かった。松陰の遺著にも、萬介や素水についての記述はあまり見られない。特に素水については、酷評した部分さえある。その

点、左内についての記述はかなりあり、それも高く評価したものが多し。積徳堂という命名は、明の帰化人の筆による「積徳堂」という額を家塾の号として三千の子弟を養成したことに由来する。



平戸山鹿家門

(2) 先師と仰いだ要諦

松陰が素行を先師と仰いだのは何故か。素行の名は義矩、松陰の字は義卿、名は矩方。いずれも素行の名の一字が用いられている。果たして意図性もあつたのである。か。もともと、吉田家の先祖は、初代重矩から第六代矩達まですべて「矩」の一字を用いているから、これを踏襲したものであろう。

武教全書講録の巻頭にある『開講主意』には「先師曾て北条安房守の宅に召し出さ

れ、赤穂謫居の命を承けられたる時の事を見ても、先師平日の覚悟筋を知るべし。又赤穂の遺臣亡君の仇を復したる始末の処置を見ても、大石良雄が先師に学び得たる所知るべし」と記されており、如何に素行を崇拝していたかがうかがえる。

この他、先師として素行を崇拝した記述は随所に見られる。例えば「万世の俗儒が『尊外卑内』の思想に陥つた時代に、独り卓然として異説を排し、上古神聖の正道を究め、中朝事実を選ばれたる深意を考えて知るべし、吾れ願はくは閭族（一族全部）相謀り、志を勵まし、先師の行実に負くことなからんことを欲す……」など。

素行は9歳にして四書・五經・詩文を覚え、同僚の中で彼の上に出る者はいなかった。未だ30歳ならずして名声赫々（光り輝く）、將軍家光も彼を配下に加えようとした程の英才であつた。こうした学問の深さにも感服したと思われる。また、久保清太郎には「僕も武教全書を研究する事数十年、全書の意味少しは會得（わかつ）けり候」と書き送っている。以上からも、松陰

が生涯にわたって素行を先師と仰いだことが推察できる。

(3) 相反する師弟

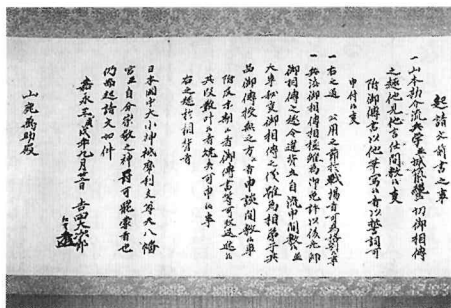
浅野侯は「貴公の賢を以てせば諸侯必ず招致するものあらん。苟も万石に足らざれば即ちその招聘に應ずるなかれ」と告げているが、素行の気持ち代弁したように思われる。実際、素行は松江、紀州、加賀などからの召抱えを知行不足を理由に辞退している。松陰は禄高の高低など主君に仕える要件ではないと考えていたから、禄高に拘る素行には尊敬の念は湧かなかつたはずである。

また、「保元平治の末より朝廷の政衰え、武家これを補佐し、遂に武臣の威天下を平治せしむ。これより朝廷日に衰え、武家の政道日に新なり。朝廷の道を失いて、名は王者にして実は王道を失いて、武家頗る王道を得ればなり。天下は有道に帰して無道に帰せず。水の低きに流れるに同じ。何ぞ専ら古に反らんことを願うや。天の与するところ、武家にあつて公家に非ず」は素行の考えである。

さらに、松陰が最も崇拝した尊王家・楠木正成について

も、既成秩序を無視して向こう見ずな尊皇討幕論は認められないと批判的である。皇室を崇拝し、諫言を根底に置く松陰が激しく反駁したい所であり、絶対に容認できない所である。しかし、これらについての反論はその遺著には見られない。

素行は「天下を治める道の要は規則を立てること」とも残し、規則を厳重にして、人間を鑄型にはめ込んで育てようとしている。松陰はむしろ規則をできるだけふり落とし、指導者の徳や集団の和みでもって教化しようとする。師弟や同志の気持ちを通じ合うことが、人間教育にとって最も重要だと主張する。松下



松陰の起請文 (平戸観光資料館)

村塾にも規則が設けられた跡はあるが、塾生はそんなものは見たこともないし、知りもしないと述懐している。規則は有名無実であつたようだ。

孔孟も控え目に論じている利欲利心を積極的に肯定し、「先儒無欲を以てこれを論ず。それ誤謬の甚だしきなり。人欲を去る者は人に非ず、瓦石に同じ。人欲は善行の基礎。排すべきは欲ではなく欲の「惑い」である。この利心あるより聖人に至るべし。利を本とする故、この道立ちて行われ、君君たり、臣臣たり。この利心失却せば、君臣上下道立たず」と利を奨励すらしている。

利を君臣結合の本とする素行と父子の情を君臣結合の本とする松陰とは、これまた相容れないはず。凡そ人の人たる所以は私心を除去するにあり。これ聖学の工夫なり。寡欲、薄欲などは松陰が最も重んじた所である。この利欲という面においても両雄は相容れない。一方では先師と崇拝しながらも、他方では敵対関係にあり、全く対照的な師弟とも見られる。

5 後世に及ぼした影響

後に凡士が兵学の道場を開くに当り、素行の門人であつたと偽って看板に誇大表示したり、素行の著述と称する偽書が多く出回つたという。儒教精神と日本の精神を融合させて武士道教義を打ち樹ててから後、武士道論がにわかには盛んになり、多くの兵学書は素行の武士道論を下敷きにしている。

しかし、素行自身は朱子学を以て幕府に仕える林家の怒りに触れ、林羅山の門人録から抹消された。このため、朱子学者としての素行の門流はほとんど消えている。また、罪を得て赤穂に流されたため、赦免後も自論を説くことを許されず、素行の流れは一代を以て絶えた形となつた。

だが、その精神や思想が後世に及ぼした影響は実に大きい。後人は素行の書に親しみ、知らず知らずの内にその薫陶を受けた。特に武教全書は、素行没後において、山鹿流兵学の教科書として広く全国に普及し、長きにわたって使用されてきた。不朽の名著であつたことがうかがえる。松陰は赤穂浪士への影響も大きかつたと見ているが、これには否定的立場を採る識者もいる。

素行の思想から推察すると、討ち入りを称賛するとは考え難い。「君の讐を報ずる事、これ勇士の節に死するの大義なり」としているが、同時に「但し君の仇といふも仔細あるべし。その君無道にして、天子命じて罰せられなれば、仇を報ゆるの義あるべからざるなり」と条件を付けている。素行は「士は己を知る者の為に死すと、(浅野)公は臣の愚を以てせず、臣を待つに国士を以てす、宜しく一死以て報ずべし、尚ほ公の諸臣万一緩急あらば、豈に償う所なからんや」と浅野公に語っているが、如何にも家臣の討ち入りを予測していたかのようである。

松陰が先師と仰いで多大な影響を受けたことは既に述べた通りであるが、松陰を不面の士として仰いだ乃木希典にも大きく深い影響を及ぼした。乃木は殉死を覚悟した際、素行の名著『中朝事実』を書き写し、大事な部分に傍線を入れて皇太子に奉呈している。素行が幕府の罪を得ることなく、順調にその思想を説き進めていたならば、その名は世に広く現れ、入門者も膨大な数に上つたことであろう。

18年度購入図書

- 『萩沖の魚たち』中澤さかな・堀成夫著、萩ものがたり法人
- 『吉田松陰と現代』加藤周一著、萩ものがたり法人
- 『吉田松陰』玖村敏雄著、マツノ書店
- 『勤皇志士遺墨鑑定秘録』高橋角太郎著、マツノ書店
- 『周布政之助伝上』周布公平監修、東京大学出版会発行
- 『周布政之助伝下』周布公平監修、東京大学出版会発行
- 『ルーズリーフことばの百科事典』言語情報センター編集、ぎょうせい発行
- 『ことばの知恵・知識事典』現代ことば研究会編集、ぎょうせい発行
- 『事件できごとクロニカル』国際ジャーナリスト会議、ぎょうせい発行
- 『萩ものがたり、萩の史碑』一坂太郎著、萩ものがたり法人
- 『萩ものがたり、山田顕義』秋山香乃著、萩ものがたり法人
- 『山口県教育関係法令要覧』山口県教育庁教育政策課監修、ぎょうせい発行
- 『吉田松陰』岡田岩吉著、山水会発行
- 『現代語訳 松陰・象山名著集』上村勝弥編集、先進社発行（昭和7年発行）

18年度寄贈図書

- 『山口県文書館蔵吉田松陰関係資料』3冊山口県文書館編集、山口県発行（山口県から）
- 『和して同ぜぬ坂本龍馬の魅力に迫る』折本章著、KKエポ印刷（著者折本章氏から）
- 『日韓比較尊皇攘夷思想研究』桐原健真著、（著者桐原健真氏から）
- 『書評〔川口洗編著日本の経済思想世界〕』桐原健真著、日本経済評論社発行（著者から）
- 『ペリーと下田開港』森義男著、下田史談会発行（周南市小柳生坤氏から）
- 『黒船』石井直樹編集、サン印刷出版室発行（周南市小柳生坤氏から）
- 『吉田松陰の思想と生涯』玖村敏雄著、山口銀行経営管理部発行（山口銀行から）
- 『吉田松陰一日一言』川口雅昭編、致知出版社（山口県教職員団体連合会）
- 『山口県史、資料編、考古1、原始』『山口県史、資料編、考古2、古代以降』『山口県史、史料編、古代、古代史料』『山口県史、史料編、中世1、記録』『山口県史、史料編、中世2、県内文書1』『山口県史、史料編、中世3、県内文書2』『山口県史、史料編、近世1、政治1』『山口県史、史料編、近世2、政治2』『山口県史、史料編、近世3、経済1』『山口県史、史料編、幕末維新1、政治・社会1』『山口県史、史料編、幕末維新2、政治・社会2』『山口県史、史料編、幕末維新3、政治・社会3』『山口県史、史料編、幕末維新6、軍事・諸隊』『山口県史、史料編、近代1、政治・社会・文化1』『山口県史、史料編、近代4、産業・経済1』『山口県史、史料編、現代1、県民の証言・体験手記編』『山口県史、史料編、現代2、県民の証言・聞き取り編』『山口県史、史料編、現代3、言論・文化プランゲ文庫』『山口県史、資料編、民俗1、民俗誌再考』『山口県史、資料編、民俗2、くらしと環境』山口県編集・発行 全20巻（山口市、大田恭次氏）

18年度寄贈ビデオ・DVD

- 『検証、北朝鮮工作船』東京財団（周南市 小柳坤氏）
- 『サムライたちの小笠原諸島』東京財団（周南市 小柳坤氏）
- 『松陰、ペリー暗殺を謀る』東京財団（周南市 小柳坤氏）
- 『松陰の道』（全3巻）青森朝日放送局制作（青森県中泊町 柳沢良知氏）

19年度購入図書

『萩ものがたり 井上剣花坊』井上剣花坊顕彰会編集、萩ものがたり事務局発行

『萩ものがたり 高島北海』高樹のぶ子著、萩ものがたり事務局発行

『吉田松陰の予言』浜崎惟著 Book and Books株式会社発行

『長崎街道2, 肥前佐賀路』図書出版のぶ工房編集 遠藤順子発行

『歴史人物なぜなぜ事典 吉田松陰・井伊直弼・ペリー・ハリス』ぎょうせい

『歴史人物なぜなぜ事典 高杉晋作・坂本竜馬・勝海舟』ぎょうせい

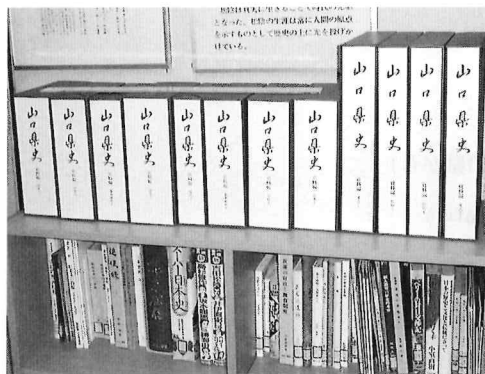
19年度寄贈図書

『抄録輯、留魂の思想第一輯』櫻井健一著・発行、(福岡県、櫻井健一氏)

『復古記』東京大学史料編纂所、マツノ書店復刻、全15巻(山口市、大田恭次氏)

『教育学大全集』第一法規発刊、全35巻(秋芳町、室謙司氏)

『高杉晋作』海原徹著、ミネルヴァ書房、(著者 海原徹氏)



『山口県史』



『復古記』

平成4年から16年間松風会理事を務められた石原啓司氏が去る9月18日なくなりました。
ご冥福をお祈り申し上げます。

財団法人松風会役職員

役 職 名	氏 名
理 事 長	松 永 祥 甫
常務理事(事務局長)	室 謙 司
理 事	大 田 恭 次
理 事	岩 本 肇
理 事	河 村 太 市
理 事	濱 本 研 一
理 事	吉 村 洋 輔
理 事	岡 本 早智子
理 事	藤 永 寿 敏
理 事	松 田 輝 夫
理 事	折 本 章
監 事	西 本 正 彦
監 事	加 藤 紀 之

(財) 松風会の研修関係

- 1 松陰研修塾基礎コース2年次3回目
10月20日(土)21日(日)
松陰の足跡を訪ねて、長崎街道・平戸街道・平戸市巡検
 - 2 松陰先生に親しむ会(松陰教学研究会)
12月8日(土)9:00~16:00
岩国市民会館
内容「武士道に則った松下村塾の教育」
「吉田松陰の生家」「吉田松陰の詩文」
「吉田松陰の人間観」
 - 3 松陰研修塾基礎コース2年次4回目
平成20年1月26日(土)9:30~16:00
山口県教育会館(山口市大手町2-18)
内容「松陰の志を受け継いだ人たち」
「松陰の死生観」「留魂録」
- ※何時でも受け付けます。ご連絡を
経費 不要